



「国立民族学博物館友の会」は「みんぱく（国立民族学博物館）」の活動を支援し、博物館を楽しく、積極的に活用するためにつくられました。

発行日 2019年7月1日
編集・発行 一般財団法人千里文化財団

特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」ってどんな展示？

先行インタビュー 山中由里子先生（実行委員長、民博教授）

八月末より開催される特別展のテーマは、「驚異と怪異」。世界の人びとが、この世のキワにいるかもしれない不思議な生きものを、どのように思い描き、形にしてきたかを探るこの展示の見どころを、実行委員長の山中由里子先生にうかがいました。

今回は展示が二部構成になっています。「境界のクリーチャーたち」と題した第一部は、水／天／地という三つのパートの中に「人魚」や「龍」といったテーマごとのコーナーがあり、それぞれ地域別の違いを比較できるようにになっています。例えば人魚のコーナーは非常に展示資料が充実していて、注目してほしいポイントのひとつです。魚プラス人の表象はかなりバリエーションがあつて、地域的にも広がりがあるんですよ。同じテーマで比較することによって、想像力が多様でありつつ、人類共通のパターンもあるということがみえてくるのではないのでしょうか。

第一部と第二部の間には「驚異の部屋の奥へ」というコーナーを設けています。驚



特別展について語ってくださる山中先生。手前にあるのは展示場の模型、背後にあるのは写真カードを用いた展示構成のシミュレーション。

異の部屋は大航海時代のヨーロッパの富裕層が屋敷のなかに作った、世界中から集まってくる珍しいものを人に披露するための部屋で、博物館のご先祖でもあるんですよ。ここには、一〇月開催の体験セミナーでも見学する「三次もののけミュージアム」からお借りする資料や、江戸時代にオランダに渡り、現在ライデンの国立民族学博物館が所蔵する人魚やろくろ首のミイラも展示されます。ライデンの資料は一九年ぶりの里帰りなので注目してみてください。

第二部では、ユーラシア大陸を中心に、驚異／怪異という概念の歴史の変遷を、博物誌や地理書などの資料をとおして追っていきます。その最初に、音を展示した「聞く」という部屋を作りました。人間が視覚化よりも前に、超常的な存在を耳から感じてきたんだということを体験してもらえませんか（笑）。第二部の最後「創る」と

いうコーナーには、現代の作家たちによる幻獣表象を展示しています。ここに展示するものをいくつか紹介すると、ヤン・シュヴァンクマイエルというチェコのアーティストが小泉八雲の本の挿絵として制作した、驚異と怪異が出会ったようなコラーージュ作品、『海獣の子供』が映画化されて話題になっている漫



彫像（ヤウキャウク）
（オーストラリア）
国立民族学博物館蔵

画家の五十嵐大介さんによる特別展のための描き下ろしイラスト、ゲーム「ファイナルファンタジーXV」のモンスターなどです。このコーナーをおして、人工知能がモンスターを生み出すかもしれないこれからの時代に人間の想像力がどうなるのか、考えてほしいと思っています。ちなみに、五十嵐さんは特別展のエンブレムや展示場のイメージイラストも描いてくださっています。

これまでも日本の妖怪やヨーロッパの幻獣をテーマにした展示会はそれぞれ開催されており、それもおもしろいのですが、今回はそういったものを世界的な文脈の中で相対化させています。そうすることで、人間が自分たちの理解できないことに対してどのように想像力を使って対処してきたのか、ということがみえてきたらいいですね。地域を横断しているだけでなく、比較文学、文化人類学、歴史学、美術など分野横断的な共同研究をしてきたので、いろいろな人に楽しんでもらえる、今までになかったような展示になっているのではないのでしょうか。

- 特別展会期 8月29日（木）～11月26日（火）
- 特別展と関連した体験セミナーの実施を予定しています。山中先生にもご案内いただきます。詳しくは2頁へ！
- 10月12日（土）に特別展関連の友の会講演会を実施します。

第82回体験セミナー

もののけ怪道をゆく——稲生物怪録と小泉八雲を歩く

講師：植田 千佳穂（三次市学芸アドバイザー）、小泉 凡（小泉八雲記念館館長）
山中 由里子（民博教授）

期間：10月13日（日）～14日（月・祝） ※全行程貸切バス利用。JR 広島駅集合／松江市内解散（予定）

特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」にあわせて、日本の「怪異」を訪ねる旅を計画中です。訪問先は広島県三次市と島根県松江市。三次市は江戸時代中期に生まれた怪異譚「稲生物怪録」の舞台であり、松江市は『怪談』の作者として知られる小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が、日本の靈性に魅了され、不思議な話の数々を蒐集した土地です。物語が生まれた実在の地を歩いて「怪異」が生まれる背景をさぐります。

「稲生物怪録」は、16歳の少年 稲生平太郎が魔王のひと月にわたる脅し（日々異なる妖怪や珍現象が襲います！）に耐え抜くという物語。個性的なこの話は、系統の異なる語り本のほか絵本や絵巻にも仕立てられ、日本全国に広まりました。今年4月「稲生物怪録」をはじめ、妖怪関連資料約5000点を収蔵する湯本豪一記念日本妖怪博物館（三次もののけミュージアム）が同地



湯本豪一記念日本妖怪博物館所蔵「(仮称)稲生物怪録絵巻」(部分) 江戸時代

にオープン。三次では、この“妖怪づくし”の博物館も見学します。

幼少期をアイルランドで過ごした小泉八雲は、妖精の物語に親しみ、その経験がのちの人格形成に深く影響したといわれています。40歳のときに松江に移り住み、良き語り部でもあった妻セツの協力のもと、松江に伝わる不思議な話を蒐集。赤ん坊を想う母親の幽霊が館屋に通う「水飴を買う女」も松江で蒐集した話の再話です。

怪異は不安や恐怖の心が生み出した人間の想像力の産物です。その精神的な営みを物語の世界観とともに楽しみましょう。



小泉八雲の肖像 松江時代 1891 (提供小泉八雲記念館)

三次もののけミュージアムに妖怪関連資料を寄贈した湯本豪一先生が友の会講演会に登場します！

■ 493回友の会講演会

対談 幻獣!——そこに“在る”不思議な生きもの

話者 湯本 豪一(妖怪・幻獣研究者)、山中 由里子(民博教授)

日時 10月12日(土) 13:30～14:40

会場 本館2階第5セミナー室 ※詳細は次号にてご案内します。

第94回民族学研修の旅

もの、ひと、くにのはじまりを求めて——陸路で行くベトナム・ラオス

講師：樫永 真佐夫（民博教授）

期間：11月20日ごろから11日間(予定)

下半期の民族学研修の旅は、ベトナムの首都ハノイからディエンビエンフー経由で国境をこえ、ラオス北部のルアンナムターへと陸路で目指す計画をしています。

両国とも国土の7割を山地が占め、平地部には主要民族（ベトナム＝キン族、ラオス＝ラオ族）が、山地部には少数民族が多く暮らしています。どの地域の暮らしも急激な変化にさらされているのが現状です。しかし、幾多の山川をこえて行く道すがらで、言語、生活様式、環境利用も異なる民族が、それぞれの土地ごとに適応しようとしてきた歴史の証を見ることができるでしょう。

この旅行では、山間盆地に暮らす黒タイ族の研究を専門とする講師の案内のもと、キン族、ラオ族、黒タイ族の神話的な故地、現地産品が集まり諸民族が行き交う市場、地域や民族ごとに特徴のある住居が並ぶ村を訪ねます。懐かしいような風景、味わ

い深い料理、美しい手仕事、古くからの信仰や儀礼などに会えることを期待しましょう。ぜひご予約ください。



糸作りをするレンテンの女性 ラオス・ルアンナムター (提供・樫永真佐夫)

※いずれの旅も8月1日（木）募集開始予定。プログラムの詳細は改めてご案内いたします。計画は変更することがございます。あらかじめご了承ください。

■第491回■

「みんぱく名譽教授シリーズ」
若きガンディー

講師：杉本良男(民博名誉教授)
日時：8月3日(土)13時30分～14時40分

マハートマ・ガンディーは、四五歳で南アフリカからインドに帰り、その後の独立運動を指導しました。ガンディーのインドでの活動はよく知られていますが、思想形成期である前半生についてはあまり知られていません。一八歳でイギリスに留学したガンディーは、ヴィクトリア期の進歩的な人びとの交流をつうじて自らの思想をつくりあげていきました。拙著『ガンディー…秘教思想が生んだ聖人』には掲載できなかった写真をまじえて、若きガンディーについて紹介します。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

■第492回■

エベレストの麓に生きる人びと
—— シェルパとヒマラヤ観光の現在

講師：古川不可知(民博機関研究員)
日時：9月7日(土)13時30分～14時40分

ネパール東部の高山地域に住むシェルパ族の人びとは、エベレスト登山の手助けをするガイドとしてその名を知られています。ところが彼らの日常生活を目にする機会は、さほど多くありません。本講演では、農業や高地に住むウシの仲間ヤクの世話に精を出し、トレッキング・ガイドやロッジの主人として外国人をもてなし、登山のトレーニングに励むシェルパの村の日々の暮らしを紹介しながら、グローバルな観光がヒマラヤの山村に及ぼす影響について考えます。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

■第127回東京講演会■

世界の楽器を探る

講師：福岡 正太(民博准教授)
日時：9月14日(土) 13時30分～14時40分
会場：国立音楽大学7号館2階多目的室
国立音楽大学楽器学資料館(定員60名)
(東京都立川市柏町5-1-1)

ヨーロッパに限らない世界の音楽の研究は、一九世紀末に始まりました。それから半世紀以上のあいだ、楽器は民族音楽学研究の主要な研究テーマのひとつでした。オランダ人研究者ヤープ・クンストは、一九五五年に、民族音楽学の研究対象は伝統的な音楽と楽器であると述べています。楽器の分類と系統の解明を大きな課題としてきた楽器研究は、何を明らかにし、現在にどのように引き継がれているのでしょうか。楽器研究の歩みをたどってみます。

※講演会終了後、展示見学会と映像鑑賞会を交代でおこないます(40分)。

イベントスケジュール

- 企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年—「みられる私」より「みる私」」
開催中～9/10(火)
- 特別展「驚異と怪異—想像界の生きものたち」
8/29(木)～11/26(火)

●友の会講演会

7/6(土) 郡司みさお、藤本悠子、縄田浩志
8/3(土) 杉本良男

●みんぱくゼミナール(会場:本館セミナー室ほか)

7/20(土) 八木百合子
8/17(土) 菅瀬晶子、片倉邦雄、藤本悠子

●みんぱくウィークエンド・サロン

7/14(日) 相島葉月 7/21(日) 福岡正太
7/28(日) 寺村裕史 8/11(日) 菅瀬晶子

●その他の催し

7/6(土)、7/7(日) 体験ワークショップ
「マハーリードを和紙でつくろう！」
7/28(日) 夏休みこどもワークショップ
「フィールドワークに挑戦! — 極寒! -40℃の暮らし」
8/3(土) ワークショップ
「ドムドム! タイの香り体験」
8/12(月・祝) ワークショップ
「だれのぼうし? どんなぼうし?」

【館外での開催】

- [大阪]
●阪急生活楽校(会場:阪急うめだホール)
8/27(火) 西尾哲夫「物語は極上の嗜好品—女性が愛したアラビアンナイト」
- [東京]
●東京講演会(会場:モンベル御徒町店)
7/13(土) 塚田誠之

- ◆都合によりスケジュールが変更になる場合があります。
- ◆イベントの参加には必ず会員証をご持参ください。

ぼくのみんぱく日記
画・中川洋典



西武拝島線・多摩都市モノレール
「玉川上水駅」下車徒歩約10分。

※会員：無料、一般：500円
※ハガキ、FAX、メール、受付フォームにて事務局までお申し込みください。実施1週間前を目安に参加証をお送りします。

会員による
会員のための学習機会

みんぱく友の会
雑学サロン

7/20(土) ぶらぶら民族学「京の精霊迎え—六道まいり」説明会
8/17(土) 雑学☆発表会「戦争について考える—問題提起」

日時:第3土曜日15:30~16:30
場所:本館2階第7セミナー室

申込不要
会場にて友の会会員証、フリーパスをご提示ください。

問い合わせ先: 田和、谷北、山本 (実行委員) zatsugakusalon@gmail.com

千里文化財団 2018 年度事業概要 報告

国立民族学博物館友の会は千里文化財団が運営しています。

千里文化財団は、民族学・文化人類学の振興を図るため、国立民族学博物館と連携しその普及に努めるとともに、それらの活動をとおりて人類の多様な社会や文化に対する市民の理解と教養を培い、社会の発展に寄与することを目的として設立されました。

2018 年度の取り組みとして、友の会制度を一部改定（4 月）し、「博物館を支援する会員」（維持会員及び正会員）へのサービスを追加するとともに、博物館をより一層利用していただくため、「博物館を活用する会員」（ミュージアム会員）を新設いたしました。一方で、6 月 18 日の大阪北部地震による国立民族学博物館の臨時休館の影響もあり、新設した「ミュージアム会員」を含めた入会件数が目標を大きく下回りました。今後、会員数の増強に向けてさらなる見直しに取り組んでまいります。

※大阪北部地震による臨時休館ほか

臨時休館期間：6 月 18 日（月）～8 月 22 日（水） 部分再開：8 月 23 日（木）～9 月 11 日（火）



第 92 回民族学研修の旅の様子

2018 年度事業概要

民族学・文化人類学の振興

みんなの協力のもと、学術情報をわかりやすく提供する各種事業を企画・実施いたしました。

- ・「梅棹忠夫アーカイブズ資料の整理及びそれに基づく基礎データの整備」への協力、研究活動支援
上記の一部のデータは、こちらで公開されています。（<http://nmearch.minpaku.ac.jp/umesao-archives/index.html/>）
- ・家庭学術雑誌である機関誌『季刊民族学』4 号（164 号～167 号）を編集、発行
- ・各種講演会・セミナー等を企画実施：
講演会は大阪 11 回 517 名、東京 4 回 152 名、広島 1 回 65 名。体験セミナー 3 回、民族学研修の旅 2 回、午餐会 1 回実施

みんなの利用促進支援

多くの方にみんなに来ていただき、活用していただくことを目的とした事業を実施いたしました。

- ・「国立民族学博物館友の会」の運営：
市民による博物館への支援と積極的な活用を目的とし、友の会制度を一部改定。多くの方々に幅広くご参加いただき、国立民族学博物館の活動に関心を持っていただく機会を増やすため、「正会員」へのサービスを拡充するとともに、「ミュージアム会員」を新設
- ・特別展図録『子ども / おもちゃの博覧会』の編集協力（受託事業）
- ・みんなの広報誌『月刊みんな』の編集協力等（受託事業）
- ・ミュージアム・ショップの運営（みんなの広報、及び教材制作及び頒布事業）
- ・みんなのキャンパスメンバーズの運営
- ・オリジナルカレンダーの制作及び広報普及活動
- ・来館者の学習支援事業（受託事業）：
展示案内学習支援等業務、研究資料整理・情報化及び利用管理業務、民族学資料共同利用窓口業務 ほか
- ・臨時休館に伴う展示案内学習支援等業務の代替業務として下記を受託し実施
基幹コレクションの整理作業業務、国立民族学博物館図書室における落下資料再配架作業
- ・特別展及び企画展の各種広報活動

博物館活動支援等

みんなに集積された知的財産を活用するプログラムを企画し博物館活動を支援しています。

- ・出前授業プログラム開発及び普及
- ・各地の博物館等の施設を活用する巡回展
岡山市立オリエント美術館特別展「国立民族学博物館コレクション ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」
9 月 22 日（土）～11 月 25 日（日）（56 日間）入場者数：7,205 人
- ・各地の博物館展示案内等の編集業務
島根県立三瓶自然館展示案内『峰々の記憶をたどって』の編集協力を受託（日本生命財団）

「国立民族学博物館友の会」会員数

2019 年 3 月末現在の会費納入件数（※下記は登録件数ではありません。）

維持会員	正会員 （家族会員含む）	ミュージアム会員	みんなのフリーパス
121 口 （法人 59 社 / 個人 4 名）	1,569 件	80 件	92 件

米国先住民ホピの暮らしと世界観

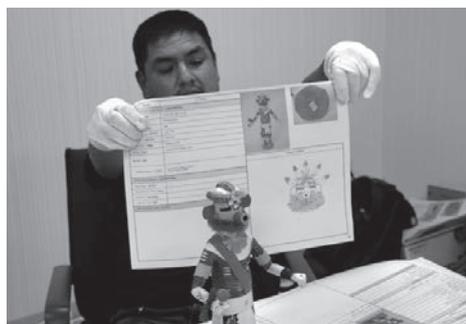
伊藤 敦規(民博准教授)

米国南西部で乾地農業を営む先住民ホピは、生存に欠かせない雨や雪や湿気、そして美や調和といった生活を豊かにする力、もしくはそうした力を携えて来訪する超自然的存在としてのカチーナを信仰しています。ホピの暮らしはトウモロコシの栽培、そして世界観は豊穣性という生命力溢れる生活を謳歌するための雨乞いの儀礼が中心となっています。

民博はカチーナを象った木彫人形をはじめ、箆や土器など五〇〇点ほどのホピ製資料を収蔵しています。ところが個々の資料の情報は収集年や収集地といった内容に限られる傾向があり、そのものがホピの人びとの暮らしぶりや世界観とどのような関係にあるのかは判然としません。民族誌に記述された没個性の解説から推測するしかないのです。

そこで民博は、梅棹忠夫氏による「博情館」や吉田憲司氏による「フォーラムとしてのミュージアム」という思想を展開し、ソースコミュニティ(資料を作り・使用し

てきた人びとやその子孫)に協力を仰ぐことで資料情報の追加収集を目指すプロジェクトを始めました(フォーラム型情報ミュージアム)。民博に招待されたホピの人びとは、資料一つ一つを熟覧し、個人の記憶や地元の歴史に基づく丁寧な解説をしてくださいました。膨大な映像による語りや調査中に記されたメモやスケッチは、デジタルアーカイブとしてまとめました。多数の個から形成されるホピの暮らしや世界観を、収蔵資料をとおして理解することができる素地がようやく整ってきました。



カチーナ人形資料を熟覧中のダランス・チェミカ氏(2014年10月16日撮影)

【報告】第81回体験セミナー

琵琶湖と生きる

—— 刺し網漁とモンドリ漁

講師：篠原 徹 (滋賀県立琵琶湖博物館名誉館長)
 渡部 圭一 (滋賀県立琵琶湖博物館主任学芸員)
 卯田 宗平 (民博准教授)

実施日：5月11日(土)～5月12日(日)

多くの固有種がいる琵琶湖ではほかの地域にはない、さまざまな漁法が生み出されました。滋賀県立琵琶湖博物館での講義や針江漁港での漁体験とおして、その漁法が地域で大切に継承されていることを実感しました。またニゴロブナの刺身「じょぎ」をはじめ、郷土の味は絶品でした。琵琶湖とともに生きる知恵を知り、豊かな土地の恵みを味わう2日間でした。参加者されたみなさまの感想を紹介します。



漁師の方のご案内で、刺し網漁、モンドリ漁、エビタツベ漁、ウナギ筒漁の体験と見学をしました。写真は琵琶湖固有のエビタツベ漁。

参加者の感想

滋賀県立琵琶湖博物館へは何度も子どもたちを連れてきていますが、私は連れて行くだけで深く見学することはありませんでした。今回いろいろとご説明をさせていただいたことを、まわりの人たちにも伝えたいと思います。孫の同伴は心配でしたが、魚や虫が大好きなので、参加者のみなさまや先生方に受け入れていただき感謝しています。今回は、何の為に博物館があるのか少し考えさせられました。(中略) 食事もおいしく、なごやかな良い時間でした。広い湖は、言葉では言えない心を広くする何かもありました。
 【北浦初子さん】

久しぶりに、おいしい日本酒とフナずしを堪能しました。ニゴロブナの刺身は初めてでしたが、驚きのおいしさでした。ヨシ原に魚のとおり道を人が設定してモンドリをしかける漁は初めての知識でした。(中略) 自然の状況をよみ判断をくだす漁師の知恵に深い感銘。
 【西村昌司さん】

琵琶湖の漁業の様子や使った船、道具の現物がわかりました。船に乗って仕掛けた網を引き上げてエビや魚をとったことは「みんぱく友の会」ならではの貴重な体験で、初夏の日差しと船にあげられた魚の跳ねる姿とともに、記憶に残ると思います。琵琶湖の鮎が成長しないこと、泥臭くない淡水魚があること、魚の固有種が多いことなど、これまで知らなかった淡水魚の世界を垣間見ることができました。ブラックバスをはじめ身近に見て、口の大きさに驚きました。【松山文佳さん】

■第487回■4月6日(土)

【企画展「旅する楽器——南アジア、弦の響き」関連】

イラン音楽の楽しみ

——伝統打弦楽器サントゥールを例に

谷正人(神戸大学大学院准教授)

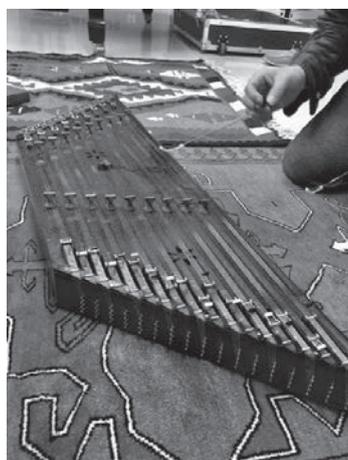
イラン音楽の特徴のひとつにいわゆる微分音の存在が挙げられます。ある旋律がその核となる音へと落ちていく際、一時的に微分音を経過するときに、微分音のもつ微妙な不安定感が後にくる音の安定感を引き立たせて、イラン音楽に独特の終止感をもたらします。微分音はイラン音楽に、何物にも代えがたい妙味を与えてくれる存在なのです。

またイラン音楽では明確な拍子がなく、音楽があたかも漂うように随時奏でられる部分が多くあります。自由、あるいは伸縮自在とも評されるこの無拍のリズムは、単に自由に漂っているわけではありません。それは、ペルシア古典詩の韻律の反映

に他ならないのです。

イラン音楽には伝統的に、大小様々の旋律型が無数にありますが、それらの多くは低音域から高音域へ、時間的流れにそって演奏されてゆきます。その旋律から音楽が次第に高まってゆくさまを聴き取ることができます。そして音楽のボルテージが極みに達したのち、今度は急速にある一定の旋律型(＝フルード forud 降下)を経ながらもとの音域・雰囲気へと戻ってゆき、ひとつの魔法の演奏が終結するのです。そうすると、勢い込んでいくように聴こえる演奏も、その後に控える更なる高揚に備えて感情表現を抑制している様子を感じることができ、フルードが単に降りるだけ

ではなく、それまで変化の極みを尽くしていた音楽を、本来基調となる音楽へと再び収束させるといって、まさしく回帰の機能を担っていることも実感することができるといえます。



調律をワンタッチで変更できる機構がついたカナダ製サントゥール

■第488回■5月4日(土・祝)

【特別展「子ども／おもちゃの博覧会」関連】

紙人形と着せ替え遊び

——遊ぶ身体への記憶

森下みさ子(白百合女子大学教授)

多くの女性が記憶にとどめている紙製着せ替え人形は、肩のオリシロを折り曲げた服を人形にかけ

るものではないでしょうか。けれど、明治のころは、人形に正面と背面があり、貼り合わせてあいだに綿を入れ膨らみをつけていました。和紙で細かいノリシロまで切り取り、服の前身と後身を貼り合わせ、人形を挟むようにして着せ替え、動かしてごっこ遊びを楽しんでいたと思われまふ。このころは、家族を想わせるような人形構成がみられました。ところが、時代が進むにつれてノリシロは大雑把になり、服で緩く挟まれただけの人形は、動かして遊ぶ「ごっこ」には不向きで「着せ替え」そのものに重点が移ってきたことがわかります。

人形も女兒や若い女性に絞られ、戦後になると、当時に人気を博していた宝塚や映画のスター、子役などが登場しています。人形の上から被せるだけの服もあらわれ、正面からの視覚的イ

メージを活かしたスターのおしゃれや舞台衣装への関心がうかがえます。和紙に代わって洋紙が用いられるようになり、教育的な意味を持たせた「手工着せ替え」を除けば、不要の型抜きが多く出回っています。人形が前身だけになるのに合わせて、スターから漫画の主人公へとあこがれが移り、少女漫画をモデルにしたファッションドール「リカちゃん」へと向かう道筋もみえてきます。

時代を経ても着せ替え遊びに託された想いは、女兒たちの遊ぶ身体をとおして脈々とつながりつつ、時代に応じたあこがれの対象を映し続けてきたといえるでしょう。



「みどりきせかえ：ひばりちゃん」
松盛堂(昭和21年以降)
国立民族学博物館所蔵

お問い合わせ、お申し込みはこちら

友の会はいつでも、どなたでもご入会いただけます。

国立民族学博物館友の会

一般財団法人 千里文化財団

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1(国立民族学博物館3階)

電話：06-6877-8893(平日9:00~17:00)

FAX：06-6878-3716

e-mail: minpakutomo@senri-f.or.jp

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



『季刊民族学』特別価格終了のお知らせ

11月1日(金)より『季刊民族学』バックナンバー(1~100号)の特別価格を終了することとなりました。

～10月31日(木)	11月1日(金)～
1冊1,000円(税込)	1冊2,000円(本体価格)+税

※在庫切れの場合もありますので、在庫状況についてはミュージアム・ショップまでお問い合わせください。価格は友の会会員価格です。